

情緒状態と動きの投影（3）

—動きを感じる群と感じない群における
イメージのちがいについて—

門 前 豊志子

目 的

情緒状態と動きの投影の関係について検討を重ねている一連の実験として、今回は、実験的に同じ情緒状態に置かれながら、刺激図形に対して動きを感じる群（以下M群と略記する）と、感じない群（以下非M群と略記する）とがあることに注目し、それら両群のイメージの投影の仕方にとどのような違いが現れるかを検討する。さらに、黒色系列と灰色系列の2系列を使用しているので、各系列におけるM群、非M群の特徴も把握することを目的とした。

仮 定

1、M群におけるイメージと非M群におけるイメージとでは、イメージの内容に相違があるかもしれない。

2、M群、非M群におけるイメージ内容は、各系列によっても相違がでるであろう。

3、表出されたイメージ内容から内的な投影のメカニズムを類推することができるだろう。

4、その投影の仕方は、M群、非M群によって異なるかもしれない。

方 法

被験者：女子短大生（平均年齢、19.5才）

刺激図形：15枚の幾何学図形。それぞれの図形は、シンプルな形態を有した幾何学図形で黒色系列と呼ばれる明度の低い黒色と、それ以外は白色の図形の組み合わせからなる一組の図形の系列と、同一の図形であるが、黒色の図形が明度の少し高い灰色になっている灰色系列と呼ばれる図形の一組がある。（図1）。
















図形番号	1	2	3	4	5	6	7	
図形								
図形番号	8	9	10	11	12	13	14	15
図形								

図1. 図形刺激（同一の図形で黒色系列と灰色系列の二系列がある）

情緒状態：快と不快の情緒状態をそれぞれ実験的に設定する。快状態は、協和音からなるエレクトーンの演奏を録音したものであり、不快状態は、同様に不協和音を録音したものである。予備実験にて、すでに情緒状態の信頼・妥当性は、検証されている。

実験手続き：図形刺激を一枚ずつスライドにて部屋中央の大型スクリーンに5秒間ずつ提示する。一枚提示後、10秒間にあらかじめ配布した記録用紙に、「動いているか、動いていないか」について記載させ、動いている場合には、その程度を5段階で評定させる。さらに動きの速さを3段階で評定させる。また、動きを感じる被験者も、感じない被験者も浮かんだイメージを自由に記述するよう指示される。図形刺激が15枚すべて提示されてしまうまで同様の手続きが繰り返される。実験中、黒色系列快群（以下CO1群と略記する）と灰色系列快群（以下CO2群と略記する）には快的な音刺激が中程度の音量で流さ

れる。不快群も（以下UC1群、UC2群と略記する）も同様に不快な音刺激が流される。

実験計画：以下の表の通りである。

黒色系列		灰色系列	
CO1群 (16名)	M群 非M群	CO2群 (18名)	M群 非M群
UC1群 (16名)	M群 非M群	UC2群 (16名)	M群 非M群

結果

まず、各例列および異なる情緒状態におけるM群、非M群のそれぞれの度数を比較検討した結果は、図2から図5に示される。この結果をみると、系列に関わらず快群では、非M（動きをかんじない場合）を示すことが多く、不快群では、M（動きをかんじる場合）を示すことが多いことが分かる。図形刺激別に概観してみる。CO1群では、いずれの図形に対しても動きを感じる度数が少ない。CO2群では、図形の7に動きを感じる度数が高い。UC1群では、図形の2、3、4、7、9と12に動きを感じる度数が高い。UC2群では、UC1群と同様の図形に加えて、図形の5と14に対しても動きを感じる度数が高かった。図形の特性をみると、動きを誘発し易い形態の図形と黒色図形及び不等辺四辺形に動きの投影が集中している。

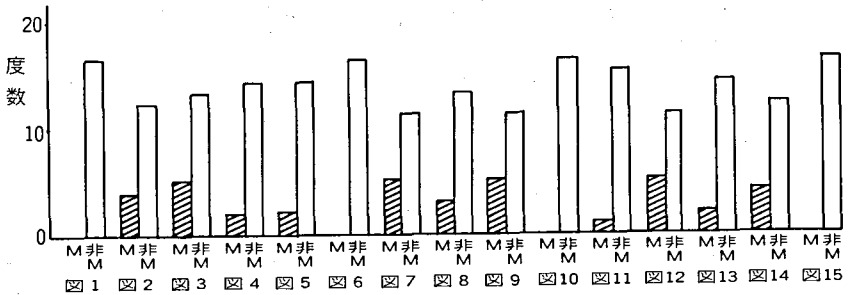


図2. CO1群におけるM・非M群の度数の比較（刺激図形別）

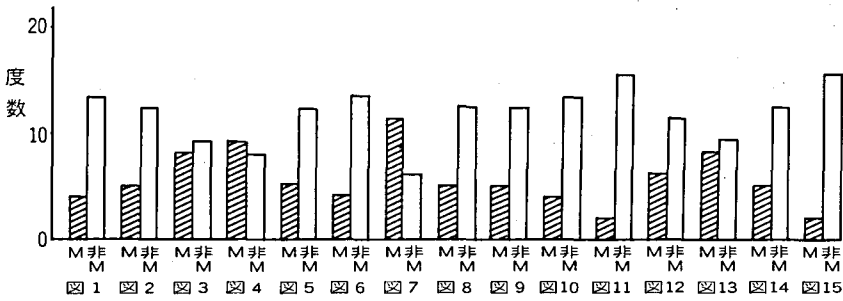


図 3. CO2群におけるM・非M群の度数の比較 (刺激図形別)

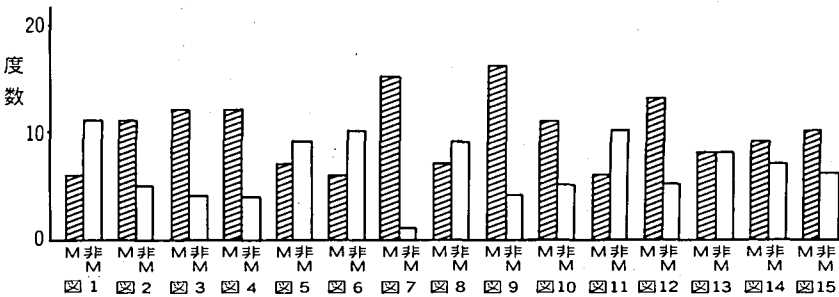


図 4. UC1群におけるM・非M群の度数の比較 (刺激図形別)

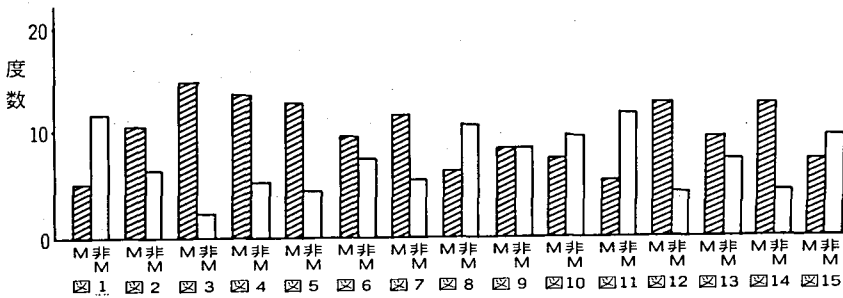
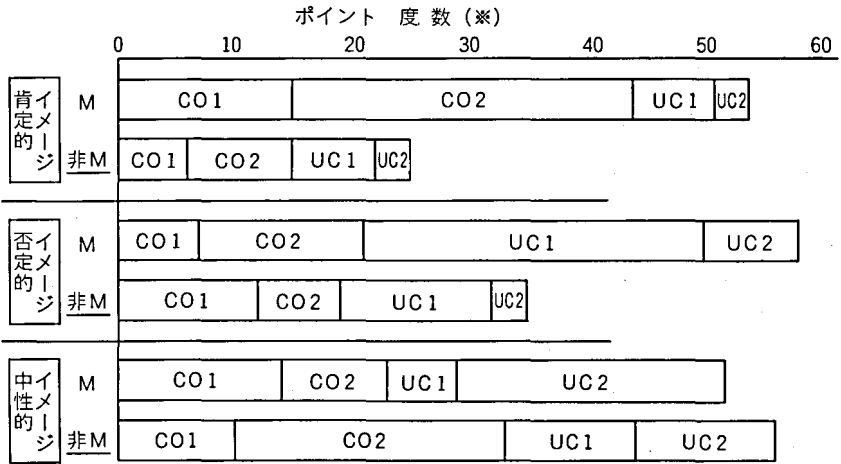


図 5. UC2群におけるM・非M群の度数の比較 (刺激図形別)

つぎに、投影されたイメージ内容を内容別に分類した結果は、図6に示される。イメージ内容は、大別して肯定的内容、否定的内容、中性的内容とその他に分けられた。各系列、各群をカイ自乗検定で検定した結果、 $X^2=29.4491$ 、 $P<0.01$ で有意差が認められた。肯定的イメージ内容は、CO2群のM群に多く、



注 4群のM、非Mにおいて、示されたイメージ内容を分類する基準として以下の様な基準で算定した。

- 25%未満 : 1ポイント度数とした。
- 25%~50% : 2ポイント度数とした。
- 50%~75% : 3ポイント度数とした。
- 75%~100% : 4ポイント度数とした。

※ UC2群のM群において、否定的イメージとは断定しにくいイメージが10ポイントあった。それらは入っていない。

図6. イメージ内容の分類別4群のM・非M群の比較

否定的イメージ内容は、UC1群のM群に多く、中性的内容は、CO2群の非M群とUC2群のM群に多かった。

さらに、具体的なイメージ内容について図形刺激別に同一図形内に出現したイメージ内容の頻度を%で示し、各群を比較したのが、図7-1、2、3、4である。この結果を見ると各群における図形別イメージの特徴がイメージ内容の中に投影されていることが分かる。

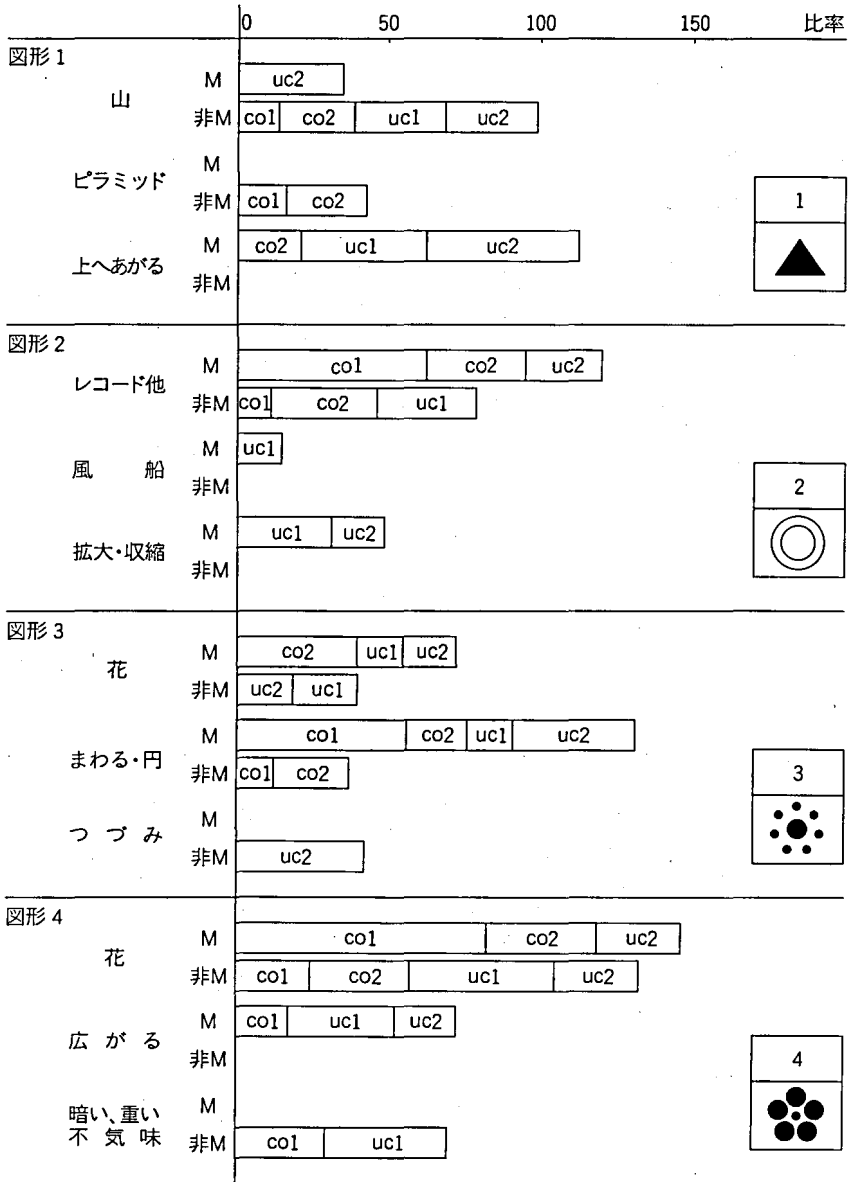


図7-1 M群・非M群における刺激図形別イメージ内容の比較
(図形1~4)

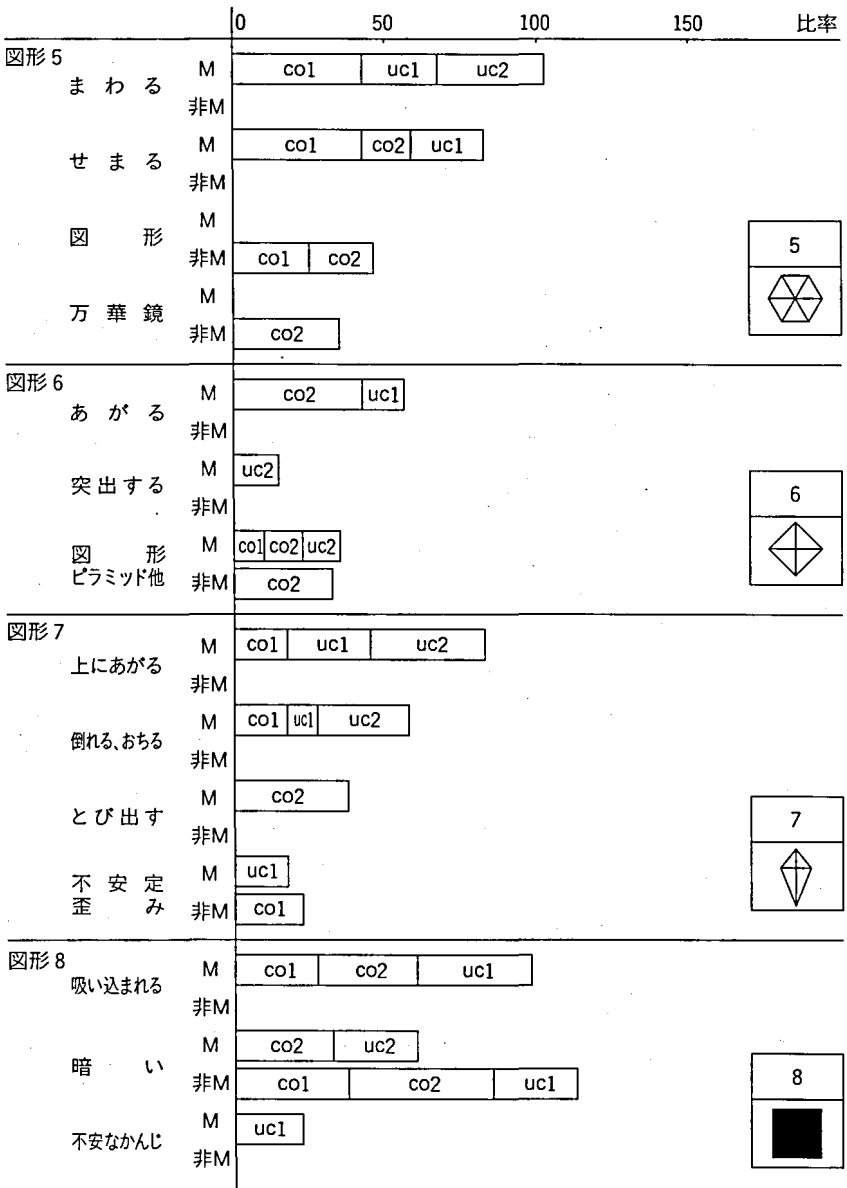


図7-2 M群・非M群における刺激図形別イメージ内容の比較
(図形5~8)

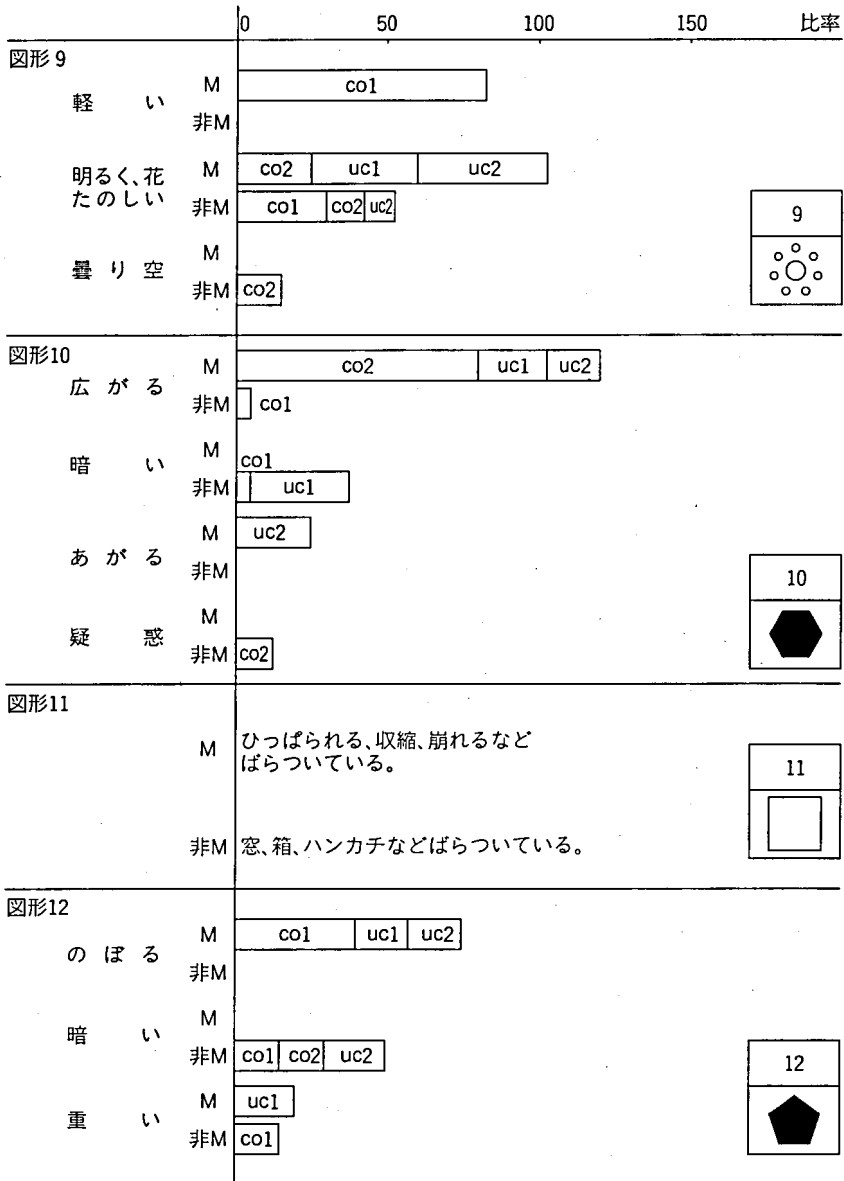
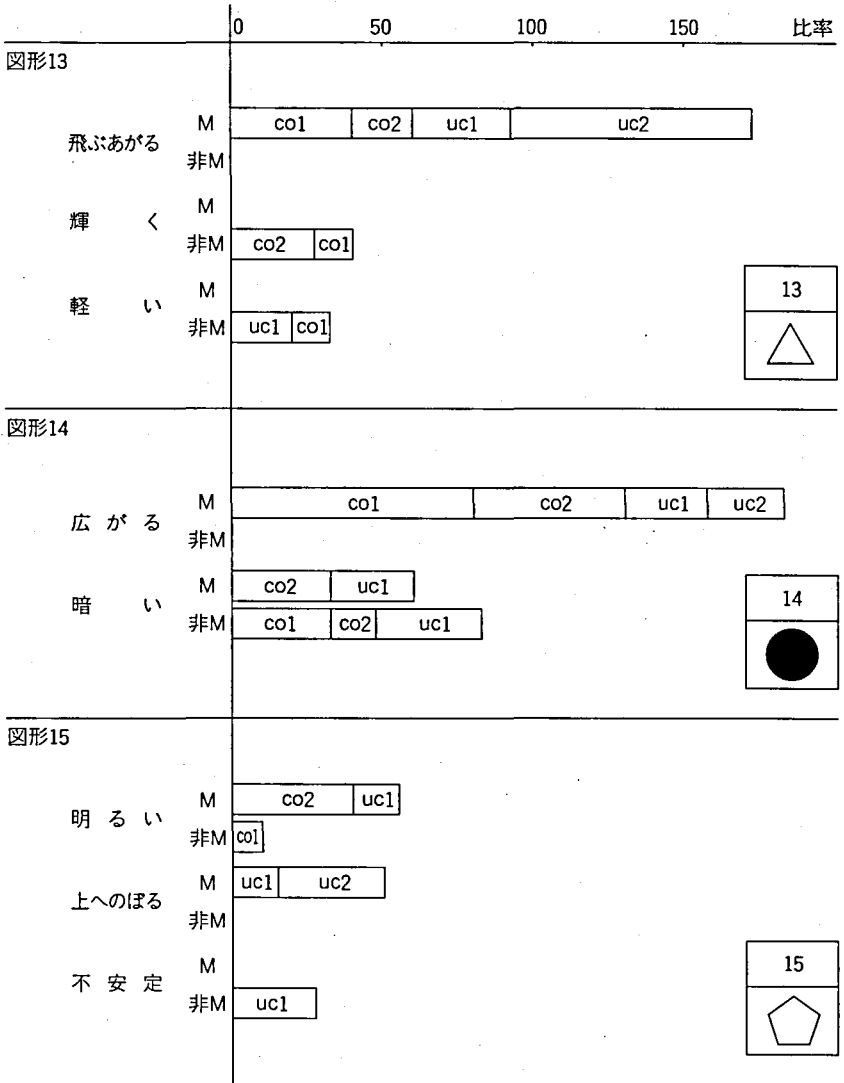


図7-3 M群・非M群における刺激図形別イメージ内容の比較
(図形9~12)



注：CO1、CO2、UC1、UC2は $\begin{pmatrix} \text{CO1群} \\ \text{CO2群} \\ \text{UC1群} \\ \text{UC2群} \end{pmatrix}$ を示す MはM群を示す 非Mは非M群を示す

図7-4 M群・非M群における刺激図形別イメージ内容の比較 (図形13~15)

考 察

以上の結果に基づいて考察をする。

まず、今回の実験の目的であり、仮定にたてたように動きを感じているM群と、動きを感じていない非M群とでイメージ内容に違いが生じたか否かを検討する。違いが生じていれば、その違いは、どういう意味を持っているのかを併せて考えてみる。

1、M群、非M群にイメージ内容の相違が認められたか否かについて

図6で分かるように、全体でとらえた場合、M群では、肯定的、否定的、中性的なイメージ内容の出現頻度が非M群に比べて高い。非M群では、中性的イメージ内容が一番多く、肯定的、否定的イメージは、M群に比べかなり低い。また、各群別にみても、M群では、肯定的イメージ内容の出現するのはCO1、CO2群に多く、否定的イメージ内容は、UC1、UC2群に多い。このことから、動きを感じるM群では、動きの中に感情を移入して、イメージへと発展させ投影させていることが明らかであるといえる。情緒状態が快的なときには、肯定的イメージに、不快なときには、否定的なイメージに置き換えることによって、情緒状態を享受する柔軟さがみられる。それに対し、非M群は、感情を移入する手だてがなく感情を移入しない形のイメージとして結果的に中性的なイメージ内容が多くなったのではないかと考えられる。動いている感じを持つことは、刺激の中に自分自身を投入して、情緒を開放してゆくことができたり、内的情緒を処理したりしてゆくことができることを示唆している。動きを感じない場合は、刺激と自分自身とは隔離されていて、情緒を開放していたり、処理していく方法として刺激との有効な関係をもたず、情緒を抑えたり、逆に、刺激を無視したりして刺激と情緒との間に円滑な相互作用が生じにくくなっているのではないかと考えられる。臨床的な観点からこの結果を考えると、人間関係を含め、人が置かれた状況で、刺激との相互関係の中で情緒を開放していたり、情緒を受け入れていくことができる方が、そうでないよりもより適応的な関係を持てるのではないかと考えられる。動きが刺激と情緒との媒

体の役割をしているともいえる。つまり、日常では目の動きや喜怒哀楽などの表情の変化、声の動きとしての抑揚、身体の動きとしての身ぶり手振りなど様々な動きの中で日常では情緒を発散させているといえよう。

2、系列によってイメージ内容に違いが認められるか否かについて

今回の実験では、黒色系列と灰色系列の2系列におけるM群と非M群のイメージの特徴について検討してみたところ、系列によって、イメージの出現率に差があることが分かった。黒色系列では、CO1群のM群が少なく、灰色系列では、UC2群の非M群が最も少ない。イメージの出現率よりも、むしろイメージの内容にそれぞれの系列による特徴が認められている。黒色系列のイメージでは、重い、暗い、不安定、闇夜、月食時の太陽、明かりのついていない家といった総体に暗い重苦しい内容のイメージが多い。これは、黒色系列の刺激図形の色調のなかの黒色をした図形刺激の影響を否めない。黒色をいかにうまく自我に統合していくかが課題となろう。黒色の色調に圧倒されて拒否的になるとイメージは浮かびにくくなるし、浮かんでも「変な模様、穴凹」といった中性的で苦し紛れに表現するといった感じが顕著にみられる。灰色系列のイメージでは、全体に広がっていくイメージ、拡散していくイメージ内容と、明るいイメージ内容やポーとした明るさやほんのりした明るさを伴ったイメージ内容が多いといえよう。灰色の色調が与える温かい感じの影響が大きいだらう。黒色に比べて、灰色の方がすんなりとその色調を受け容れやすいことがイメージを想起させやすい一因になっていると考えられる。また、系列による色調の違いと図形刺激特性及び情緒状態との関係という相乗的影響を無視することはできないと考えられる。特に同一の系列でも情緒状態の違いによって、イメージ内容にちがいがみられるし、M群、非M群においても差が見られることから、系列だけからではなく、図形刺激特性ならびに情緒状態との関係についても次に検討してみる。

(1) 黒色系列 (CO1群、UC1群) におけるM群、非M群のイメージ内容の比較検討

CO1群では、黒色の図形に対する反応と白色の図形に対する反応に特徴があることが分かる。黒色図形刺激では、吸い込まれる感じやゆっくりした動きが投影されているのに対して、白色図形刺激では、軽い感じ、上に飛んでいくあるいは、上に昇る感じが投影されている。また、図形の形態との関係では、不安定な形態を有する図形刺激に対しては、不安定な動きの投影がみられるものの、下降傾向よりも、上昇する弾んだ動きが多く投影されている点で、UC1群のM群のように、「倒れる、迫る、重くのしかかる、迫りながら上にあがる」といった不安定な重い感じの投影のされ方とは異なっていることが分かる。白色図形に対しても落ちる、渦巻きが広がる、崩れてゆくといった不安な内容が多く、黒色という色調だけではなく、情緒的に不快な状態との相乗的な影響を受けていると考えられる。非M群に関しては、CO1群、UC1群ともに重い、暗い、圧迫されるなどの不安定なイメージが多いが、UC1群では不気味な感じ、淋しい感じ、厳しい感じや冷たい感じの投影が多くされている点、CO1群とは異なる情緒状態に置かれているが故の感情の投影がなされていると判断できよう。

このように見てくると、動きのあるイメージとして想起される場合と、されない場合を考えてみると、刺激を受けて動きを感じ、動きの中でイメージを想起させていくプロセスでは、主体的に刺激の中に自分自身の感覚や感情を融合させていけることが必要なのではないかと思われる。つまり、刺激状況にいかに乗れるかということである。刺激と主体とが心理的に遊離した関係では、刺激は刺激、主体は主体として別々のまま隔絶され刺激状況を共有できていないため、刺激に圧倒されたり、刺激を拒否したりして、十分に相互の関係を享受していない結果がイメージ内容に現れているものと考えられる。動きを感じられることは刺激に対して、あるいは、刺激状況に対して主体的な関わりを意味していると考えてもいいだろう。

(2) 灰色系列 (CO2群、UC2群) におけるM群と非M群のイメージの特徴
灰色系列におけるイメージは、M群では、否定的内容と肯定的内容の両方が

出現している。外に向かって広がる感覚、飛び出す感覚と何かお化けのような得体の知れない、とらえ所のないものが出てくる不安な感覚とが動きの中に投影されているのが特徴的で、これは漠然とした灰色の色調が肯定、否定の両側面の投影を促しやすかったと考えられる。非M群では、遠くから見た建物とか雨のピラミッドといった通景的なイメージやガラス、金平糖といった透明感のあるイメージが多いこと、不快状態の非M群では、中性的内容が多い反面動きを感じる被験者も多く、灰色の色調は、黒色よりも動きを感じやすくさせ、動きを通して不快感の解消を促しやすいのではないかといえる。

3、仮定3および4で考えたように、イメージ内容から内的な投影のメカニズムが類推できるか否かについて検討し、M群、非M群で特徴が見られるかを検討する。

動きのあるイメージを投影する場合とそうでない場合とでは、内的な状態が異なるように思われる。動きの中に自己を投入できるか否かが一つの大きな違いである。さらに、動きを投入した場合に外的刺激をどのように処理できるかということがもう一つの違いである。動きと情緒はなかなか切り放せない関係にあるのではないかと思われる。すでに述べたように情緒の様相は、動きになって表出されやすいし、動きのなかで情緒は変容し、昇華されうる。動きの中にいかに自己の情緒を投入し、イメージとして変容させていくかが自己の置かれた情緒状態や刺激状況を享受できるかということにつながっているように思われる。快的な情緒状態に置かれればその中で快的な感じを十分楽しめるかどうかということになる。不快な状態に置かれてもその不快さを拒否するだけでなく、不快な状況を不快として受け容れながらその中で楽しむ方を見つけられるかどうか動きのなかでのイメージ内容となって現れてきているように思われる。M群では、動きの中に自己の感情移入をしながら、動きの速さや方向性でもって不快感の解消をはかったり、内的葛藤の調整をはかったりしているが、非M群では、動きを感じることができない、外的刺激のなかに動きを感じることができない群であるということは、主体の感情と刺激との間に距離が

あることを示しているように思われる。なぜ距離を感じるのかは、内省報告を十分聞いていないので憶測の域を免れないことを許していただくとして、自分をすぐに状況に応じて開放していける性格でないとか、動いていない図形に対して動きを感じる必然性がないといった知的な判断などが情緒の自由な活動を阻止していると考えられはしないだろうか。

情緒は、快、不快だけではなく両者の葛藤もあるし、さらに快といってもたのしさ、のんびりしたりしたおだやかさ、ゆったりしたかんじ、わくわくしたかんじ、喜びの感じやうれしさの感じなど様々な快の状態があることがイメージ内容からよみとれる。同様に不快といっても不安な感じ、不気味な感じ、寂しさ、厳しさ、不安定な感じ、倒れそうな感じ、迫ってくる感じなど内的に不快な感じが生じてくる場合と、内的にはさほどでもないが、外からの影響で不快感がおそってくる場合があることが明らかである。本実験におけるイメージが単なる空想と異なる点は、主体が置かれた情緒状態を何らかの形で処理せざるを得ないということだろう。処理の仕方は、仮定したように、M群、非M群で違いがあるように思われる。M群では、動きの速さや方向性といった動きの質的側面をうまく利用しながら不快感を解消したり、快的感じをもっと強化しているのに対して、非M群では、刺激を拒否したり、刺激に圧倒されて動きが抑制されて中性的なイメージ内容に置き換えようとする傾向が非常に強いことがわかる。その理由として、情緒的な刺激に巻き込まれるのを敬遠する性格とか、予期せぬ情緒状態をすぐに受け容れかねるためらいの強さとか、あるいは不快な場合では、不快な感じに自由な情緒の動きが拘束され不快感のみに支配されて他の情緒の活性化が縛られてしまっていることなどが考えられる。

このようにみえてくると、主体が自らの情緒を受け容れその情緒に浸りながら、縛られることなく情緒から開放されることがよりいきいきとした感覚を享受できる原点なのではないかと示唆された。その意味で、動きは情緒と主体とを内的世界から外的世界へと導いていく媒体としての役割を果たしているのではないかと示唆されたように思われる。

今後はさらに詳しく情緒と動きのメカニズムの解明を試みていきたい。

(この論文は、日本心理学会第57回大会(1993)での発表を基にさらに検討を加えたものであることを報告しておきます。)

参考文献

水島恵一・小川捷之編 イメージの臨床心理学 誠信書房 1985

門前豊志子 1983 彩色・無彩色図形におけるイメージの投影について 信州
豊南女子短期大学 第1号, 55-72.

安田一郎 感情の心理学 青土社 1993